



「園暮らし」が始まる

生えそろった芝生を掘り出して、細かくちぎって…子どもたちに手伝ってもらいながら、駐車場脇に芝生の苗床を作りました(下段の写真)。これを7月の下旬くらいまで育てて、土の露出した園庭に戻していこうという算段です。芝生の赤ちゃんを大事に見守ってください。

専門家からこういった方法を聞いて、半ば興味本位でトライしてみることにしたのですが、個人的には、多少芝生がハゲていようが、使ってなんぼの園庭なので、あまり気にしないのです。マメに雑草を抜け、芝を刈れ、肥料をやれ…彼らは口うるさいのですが、お天気との相談もあるのも、意外に時間は取れないもので、結果的にそこそこになってしまっているのです。

倉本聡という脚本家をご存知でしょうか。彼の書いた「北の国から」というテレビドラマの撮影を始めた頃、主人公の父親が、懸命に畑作業を取り組む場面を見て、もつとダラダラとのんびりとやる

よう演技指導したそうです。既に北海道に移住していた彼は、本物の農作業のありようを実感していたからでした。

頑張り過ぎないことが、長続きの極意…と言いつつ、訳をしながら、伸び過ぎた芝刈りに勤しむのが、この季節。

さて、いつでも保育を見学してください…それが誠美流なのですが、とはいえず、何かきっかけが合った方がと、年間に「保育参観週間」を設けています。(なので、いつでも参観できるのですよ。)

そして、それをもう一歩進めて、第三者(参観者)としてではなく、保護者の方も一緒に園生活をしてみませんか?という試みを、今年度からスタートすることにしました。題して「園暮らしの日」。他園では、「保育参加」といった「他園を見守る保育者の立場を体験してみよう」というニュアンスを帯びた呼び名がつくことが多いのですが、まずはあまり構えずに、子どもたちと一緒に暮らししてみよう、一緒に生きてみよう、そこから何かを学んでみよう、考えてみよう、そんな思いを「園暮らし」に込めてみま

した。

ゲストとしてではなく、共にひとつ屋根の下で過ごす生活者として、いつときを過ごす仲間として、我が子以外の子どもたちと関わりながら、生活全般をお手伝いいただきながら、自然体で過ごしてもらえればと思っています。

3〜5歳くらいのクラスでは、「参観」の日であっても、時おり、子どもたちと楽しそうに関わっている保護者の姿を見かけます。その夢中になっている姿を見たある担任が、「子ども側の目線に立つてもらうことが、保育参加の意味か」と書いた記録を読み、なるほどと思ったことがありました。サポート役の大人の立場を体験しているようで、それを通して「子どもの立場」を学んでいる…そこが本質なのかもしれません。

(一般社会と違って?) 子どもも中心の、子ども本位の小さな社会だからこそ、見えるものがある、大人社会で失いがちな大切なものが見えてくる…。



う期間があります。近年、SIDS(乳幼児突然死症候群)が目目されるようになり、乳幼児施設では、数は少ないのですが、その3割が、利用開始1週間以内に発症しているというデータもあります。これは、環境変化による過度なストレスが背景にあるとも言われていて、「慣れ保育」のあり方が、ますます重要視されるようになって来ました。(当園でも、慣れ保育期間の初期に、親子で園生活を始めるというステップを入れています。)

保護者がいない時は保育園で、保護者がいる時は家庭で…もちろん、致し方ない部分もあるとはいえ、こういったわかりやすい分断(大人たちの都合?)に、実は子どもたちは少し翻弄されているようにも感じます。

親子で過ごす保育園、大人の居場所の保育園…すでに別棟の「子育て広場」では実現されていることですが…ここにも、これからの子育て環境の行方を考えるヒントが隠れているように



特に、参観との違いを実感しやすいのが、0〜2歳児かもしれません。クラスそれぞれタイミングでスタートのお知らせを出していきますので、ぜひお時間を作っていただき、いつか園暮らしを体験してみてください。

園長 折井誠司

●編集 誠美保育園
●発行人 折井誠司
●印刷所 誠美保育園
●発行所 社会福祉法人 誠美福祉会
〒192-0364 東京都八王子市南大沢5-1-2
電話 042-675-1551
ファックス 042-677-5643
E-mail sebi@nokken.jp
http://nokken.jp/